

## ロウソク談義

吉田重知

けい光灯の使用が、文化を代表するともいわれているような時代に、いまさらロウソクでもないだろうと思われるかも知れませんが、なかなかどうしてロウソクも捨てたものではないのです。

ロウソクの利用といえば、せいぜい停電のときぐらい、仏心のある人でも仏壇にあげることしか思い出さないかも知れませんが、だがもうすこし考えてみると、クリスマスの聖夜を送るときに食卓にかざるきれいな色をしたネジリ棒ロウソク、あるいはバースデー・ケイキの飾り用ロウソクなどがあつた気もするなど、洋画の一コマが目に見えてくるでしょう。灯をともしたときのあのやわらかな感じは、このあわただしい世の中をひとときでも忘れさせ、なにかほのぼのとした暖かみを

人の心によびおこして、独特な雰囲気があったよつてくるような気がしませんか。そういうわけで、近頃のロウソクの需要は案外バカにできず、日本の生産高は世界でも三番目で、豪華なロウソクとなればその肌ザワリは宝石そつくりというのもあり、おもにアメリカに輸出され、外貨をかせいでいるのだそうです。

ですが、そんな意味でロウソクは捨てたものではないといったわけではないのです。近頃の学生諸君に、もしご存知なければ、一読をおすすめた本があるからです。それが「ロウソク科学」という名の本なのです。電磁感應の発見、電気分解に関する研究などでこれはだれでもよくご存知の有名なファラデーが、いまから一〇〇年ほどまえ一八六〇年のクリスマスの休みに、イギリスの少年少女のために六回にわたって行なつたお話をまとめたものなのです。

一〇〇年前のお話だといって、バカにしてはいけません。ファラデーもそのなかでいつているように「いろいろのものを支配している法則のうち、ロウソクの話のなかに出てこないものは一つありません」というわけで一本のロウソクが燃えるということを取りあ

げて、そこにあらわれる物理的あるいは化学的な現象を、われわれの前にあざやかに、と  
き示してくれるのです。よみ終わって自然の  
営みがどんなに巧妙に行なわれているかに思  
いあたり、深い感銘を受けずにはいられませ  
ん。

火のついているロウソクの上部には液体が  
まわりに流れ出ないように、外側のところは  
溶けていないのです。これはロウソクの熱の  
ために下から上に向かって、空気の流れが生  
じます、そのために外側は冷えて、ロウソ  
クのふちは真中よりも温度が低くなっている  
ためなのです。このことだけでも、なんと美  
事な自然現象のあらわれではありませんか。

さらに愉快なことは、この話の中で日本の  
ロウソクのことにもふれて、その装飾がフラ  
ンスのロウソクよりも立派であり、その上注  
目すべき特徴をもっている非常に進歩したも  
のであると言っております。一〇〇年前の日  
本人が示したオリジナリティーがうかがわれ  
て、大いに意を強くするところもあります。

ローヤル・インスチテューションの教授  
をやめる一年前の、このような大家から実験  
をしながら話をきけたイギリスの少年少女の  
しあわせを感じるとともに、学問の基礎とい  
うものが、その国に深く根をおろしているか

からこそ、また美しい花が咲くものであることを、いまさらのように思いおこさないわけにはゆきません。

この本の訳が昭和八年に岩波文庫で出てからでも二十七年という年月がすぎています。その定価が〇・二円ということをや、いま改めて文庫の一つ星から思い出しますと、筆者の高校時代（旧制）がロウソクの火の彼方から浮び上がってくるような気がして、感慨またひとしおです。

それはとにかくとして、前途にゆたかな希望をもっている学生諸君に一読をおすすめしながら、フアラデーの講話の最後の言葉をそえて、この小文をとじることにしましょう。

「あなたがたの生命が長くロウソクのように続いて国民のために明るい光となり、あなたがたのあらゆる行動はロウソクの火のような美しさを示し、あなたがたは人類の幸福のための義務を行なうのに全生命を献げられますように希望してやみません」

（三五・一一・九）